Departure
English Expression

Departure English Expression I Revised の目指すもの

山岡憲史

『Departure 英語表現 I』に込めた願い

『Departure 英語表現 I』は，生徒の英語表現力を伸ばしたいと望んでおられる熱心な先生方に，高い評価をいただいてきました。「生徒がどんどん英語を書くようになって，それが表現力だけでなく英語を読む意欲にもつながっている」「生徒の知的な関心を惹くテーマについて表現するなかで，文法事項が自然と定着する」といった声をいただくたび，私たちが目指したことが形となって現れたことを実感しています。

1．文法を学んで使う

文法の知識はコミュニケーション能力の中でも最も大切なもののひとつです。しかし，文法知識があることと，それを使って表現できることとは同じではありません。言葉で説明できる知識（宣言的知識）を実際に運用できる知識（手続き的な知識）にするには，文法の形式に慣れるように練習し（practice），それを実際に使う（production）ことが欠かせません。また，practice を重ねて形式に習熟しても，適切な文脈の中でそれが正しく使えるとは限りません。学習者はそのなかで何度も間違いをして，ようやく自然な手続き的知識を獲得していきます。しかし，学習すべき文法事項が多すぎると，その全てを表現のレベルにまで引き上げることは困難です。

重要な基本的文法事項を習得し，それを使って論理的な英文を書くこと――このプロセスの繰り返しが生徒たちの書く力の向上につながったのだと思います。

2．読む・聴くことを通じて文法に習熟する

『Departure 英語表現 I』には，文法事項の演習をした後に，リーディングとリスニングの活動を設けました。その趣旨は，学んだ文法事項を実際の文脈の中で確認してほしいというものです。文法の機能は context や discourse の中で決まり，発揮されます。表現する前に読んだり聞いたりして文法の文章の中での振る舞い方を理解することは極めて大切と考えます。

また，表現する際には文法だけでなく，テーマに沿った語彙を知っておくことも重要です。表現すべき内容についての理解を深め，語彙の習得を目指して「コミュニケーション英語」の読解量を補うことも，「英語表現」の教科書にリーディングとリスニングに特化した活動を取り入れた狙いです。

『Departure 英語表現 I　改訂版』の目指すもの

1．文法事項の充実

2017年 4 月に使用が開始される『Departure 英語表現 I　改訂版』では，各課の文法事項を大幅に増やしました。これは，「高校 1・2 年生のうちにできる限り文法に習熟させたい」という現場の先生方のニーズに応え，表現の幅を増やそうという思慮に基づいています。しかし，前述のとおり，表現するための文法が多すぎると理解と暗記に多くの負担を強いるため，表現レベルまで引き上げることが難しいという考えのもとに，網羅的になることを避ける配慮をしています。

例文の内容は，初版と同じく，その課のテーマ

に沿ったものにしています。例えば「尊敬する人物」の課では，モーツァルト，ガンディー，吉田松陰，伊能忠敬，オードリー・ヘップバーン，ローザ・パークス，スティーブン・ホーキンス，ビートルズなどのほか，女性指揮者として世界的に有名な西本智実さんを登場させています。無味乾燥で凡庸な例文を廃し，内容のあるものにすることで，生徒の知的関心や学習意欲を引き出したいという期待を込め，例文を丹念に作っています。

2．英文完成とグラマリングの演習

前述したとおり文法を理解した後はその演習が必要です。その際，機械的になり面白味に欠けることはある程度やむを得ませんが，『Departure 英語表現 I』では，この部分にもできる限り知的に興味深い例文を用いています。

改訂版では，新たに文章を完成させる問題とグラマリングの演習を取り入れました。文章を完成させる問題は，文章中の文法的にポイントとなる部分を空所にし，そこに適切な語句を選択肢からあるいは文脈から考えて入れるという形式です。初版では文法への「気づき」を促すために，課の最初に文章を置いていましたが，一歩進んで文脈を考えながら文法の形や意味を判断するという作業にすることにより，読むことから表現することへの橋渡しになると思われます。

グラマリングは，文法を使って語句を意味の通る文にするプロセスです。改訂版では和文英訳にこの手法を取り入れ，文法を使うという意識を醸成するための演習を設けました。例えば，「彼はバスで通学しています」を英文にするにあたって，He ^ to school ^ bus. の ^ の部分に語句を入れて完成させるというものです。この演習によって，文法を実際に使うという意識を高めて和文英訳につなげるように工夫しています。

3．「聴く」「読む」から「書く」「話す」へ

「4技能を使って文法を習得する」という従来の方針は変えることなく踏襲しています。リスニングとリーディングによって，まとまった文章の中で文法を意識しながら理解し，さらにテーマに関するさまざまな知識を得ることができるように興味深い内容にしています。聴いた後，読んだ後には内容に関する英語の質問に答える活動があります。11課以降では読んだ後に個人の意見を問う質問も用意して，自己表現につなげています。

ライティングは，初版の特徴を残して，プロセスを踏んで書く活動につなげるという手順を踏んでいます。ただ「書きなさい」という指示を与えるだけでは，どのように書けばいいかわかりません。語彙や表現を与えるだけでもまだ不十分です。coherency や discourse をしっかり理解し，どの情報をどのように盛り込めばわかりやすい文章になるかを示してやることが，入門期のライティング指導の要諦でしょう。『Departure 英語表現 I　改訂版』では，質問に答えたり英文を完成したりして書き出した情報をモデルパラグラフに則って書いていけば1パラグラフが完成するというプロセスを提示しています。このようにして容易に書けることを体感させ，書くことへの自信を持たせることが，「どんどん書く」という態度や意欲につながるのだと確信しています。このようにフレームに従って書かせることはまた，生徒の作品の添削の容易さにもつながります。

＊

英語で表現することには，言語的な知識，談話的な理解などとともに，生徒が意欲的に書こうとする姿勢を養うことが必須です。『Departure 英語表現 I　改訂版』は，高校生の知的好奇心を刺激するようなテーマを扱い，「文法を使う」という観点で無理のない手順を踏んで表現への意欲を伸ばす工夫を随所に凝らしています。生徒の「表現力」「構想力」といった literacy とともに「課題発見力」「自信創出力」などの competency を身に付けさせる教科書として，先生方のお役に立てることを願っています。

（やまおか　けんじ・立命館大学教授）